

研究論文

学生が参画する教育改善・学生支援活動の効果検証に関する一考察 ——徳島大学学生チーム「繋ぎ create」の事例から——

吉田 博

徳島大学大学開放実践センター

要約：近年の我が国の教育改善・学生支援の特徴の 1 つに学生の参画を挙げることができる。徳島大学においても学生チームが結成され、教育改善・学生支援に学生が参画する取り組みが始まっている。これらの活動には、活動に参画する学生に教育的効果があることが示されている。また、継続的に活動を行うためには、活動の効果や課題を検討することが必要であると示唆されている。本研究は、徳島大学において教育改善・学生支援に参画することを活動の柱の 1 つに掲げている、徳島大学学生チーム「繋ぎ create」の活動の効果検証を行うものである。質問紙調査をもとに、(1)繋ぎ create が実施した企画に参加した学生が達成できたこと、(2)繋ぎ create の学生が活動を通して得たものと学生生活に与えた変化、について考察を行った。また、現状の活動における課題を明らかにすることで、今後の活動に対する示唆を与える。

(キーワード：学生活動の効果検証, 教育的効果, 学生が参画する教育改善, ピア・サポート)

Effects of Student Participation in Educational Improvements and Student Support Activities ——From the Student Team "Tsunagicreate" in the University of Tokushima——

Hiroshi YOSHIDA

Center for University Extension, The University of Tokushima

Abstract: In recent years, student participation in educational improvements and student support schemes has been a featured characteristic at the university level. In the University of Tokushima, student teams were formed becoming an active participant in these educational improvements and student support schemes. It was shown that such activities have educational effects on the students who participated in these activities. Moreover, for continuation of student participation in these schemes, it becomes necessary to examine the effects and problems of this type of student participation. This study aims to examine the effects of the activities in which the student team "Tsunagicreate", whose aim is to be involved in educational improvement and student support, have participated. Thus, the following considerations were given according to a questionnaire survey implemented in this study: (1) achievements of students who participated in projects carried out by "Tsunagicreate"; (2) achievements of the members of "Tsunagicreate" and changes they have made in their university life through participation in educational improvements and student support schemes of the university. Finally, this paper provides suggestions for the future directions of these activities by disclosing present problems.

(Key words: examination of the effects of student activities, educational effects, educational improvements that students participate in, peer support)

1. はじめに

我が国の大学教育においては、学士課程教育の質的転換が強く求められており、2012 年 8 月に出された中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて¹⁾」の中では、喫緊の課題であるとされている。これまで、FD の義務化、各専攻分野を通じて培う学士力の提唱、学位授与の方針の策定など、国や各大学においてはさまざまな取り組みが行われてきた。これらの動向の中で、正課外教育の意義の捉え直しや、課外活動と学生支援を含めた教育活動全体での、学

生の能力育成が求められるようになった²⁾。

近年の学生支援活動の特徴として、多様化する学生に対応するために、学生による学生支援（ピア・サポート）が注目を集めている³⁾。日本学生支援機構の調査によれば、「ピア・サポート等、学生同士で支援する制度」の全国の大学における実施率は 2010 年現在で 35.6%であり、年々増加している⁴⁾。さらに、ピア・サポート未実施校の 46.9%が実施を検討している⁴⁾。

また、FD の義務化以降、FD の実施は広がったものの、実質化が叫ばれるようになった。実質化

に向けた新たな取り組みや研究が進められているが、近年の取り組みの特徴の 1 つとして、学生が FD や教育改善に参画する活動が年々増加している。大学が教育改善に関わる学生組織を設置している事例も存在している^{5,6)}。

徳島大学においては、2011 年 9 月に大学教育委員会が定めた「徳島大学 FD の定義⁷⁾」の中で、FD に学生の参画を得ることが明記されている。また、学務部学生生活支援課が主催する「学生支援担当教職員研究会」では、2011 年度、2012 年度共に学生による学生支援（ピア・サポート）をテーマとして取り上げて具体的な取り組みを考えるワークショップを実施した。学生による活動としては、学生チーム「繋ぎ create」が学内の教育改善・学生支援活動に参画することを活動の柱の 1 つに掲げている。このように徳島大学においても教育改善・学生支援に対して、学生の参画を促す動きや実際の活動が始まっている。

学生が参画する教育改善や学生支援活動には、学生が関わることで学生の意見を大学教育に反映できることや、学生視点に立ったより細かい支援ができるという効果が考えられる。しかし、これらの活動に学生が参画する本質には、学生を学生支援の取り組みや正課教育・正課外の諸活動、さらには大学教育の運営に参画させ、彼らのモチベーションや学習に取り組む積極的な態度をその相互関係の中で高めていこうとする教育的効果を狙った目的があり^{8,9)}、その効果についても明らかにされている¹⁰⁾。ただし、学生による活動はすべてが思い通りに進められているわけではなく、一部には支援に対する負担、教育的効果の問題、活動の形骸化といった問題が生じている場合があり、活動の効果や課題を検討していくことの必要性も示唆されている³⁾。

そこで、本研究は筆者がサポートをしてきた学生チーム「繋ぎ create」の活動の成果と課題を明らかにするために、次の調査を実施し、考察を行ったものである。1 つは繋ぎ create が実施した企画に参加した徳島大学の学生・教職員を対象とし、もう 1 つは活動を行う繋ぎ create の学生を対象とした。これらのデータをもとに、(1) 繋ぎ create の企画の成果、(2) 繋ぎ create の企画の課題、(3)

繋ぎ create の学生が活動を通して得たもの、(4) 繋ぎ create の学生の学生生活に与えた変化、(5) 繋ぎ create が今後取り組むべき課題、を明らかにする。

2. 学生チーム「繋ぎ create」

徳島大学学生チーム「繋ぎ create」は 2010 年 11 月に、徳島大学で学生による正課外活動支援を行うことを目的に、有志学生と全学 FD を担当する教員（筆者）によって結成された自主組織である。現在は、活動理念として「大学生が躍進できる機会を得るために、人と人の繋がりを創り続ける。」を掲げている。この理念のもとに、学生や教職員を対象とし、大学生活における正課・正課外での学びの意義、活動の意義を考える企画、学習支援や大学生活支援に関する企画を実施している（図 1,2）。また、全学 FD・学生支援におけるセミナー等で話題提供を行うことで、学内の教育改善・学生支援に参画している（図 3,4）。2012 年度は徳島大学学長裁量経費（教育研究等支援事業）に採択され、大学と互恵的な関係にある。

これまでに繋ぎ create は、8 つの企画を実施してきた。大学生活や学びの意義を考える企画としては、大学生活に関する内容をテーマとして、学生と教職員がディスカッション、ワークショップ、プレゼンテーションなどを行う、「真剣徳大しゃべり場」、「未来が過去になる前に話しておきたい〇〇のこと」、「DEEP PEOPLE」、「キャンパス・ビジョン」がある。これまでにテーマとして取り上げた内容は、「在学中に大切にすべきこと」、「なぜ徳島大学に入学したのか」、「心に残る授業や授業を選ぶ基準」、「授業の意義」、「高校と大学の違い」などがある^{11,12)}。また、教育担当理事を塾長とする「松下村塾 in Tokushima」では、学生と教員が「夢」や「志」について、話題提供者のレクチャーを受け、参加者同士で議論を行う勉強会を毎月開催している。その他には、学生と教員とを繋ぐ「先生とかたり場」、大学生活に適応することを支援する「一年生限定、これからが本番！」、図書館のラーニング・コモンズを活用して教員と共に学習支援を行う「スタディレスキュー WeeeeeK」を実施してきた。



図 1 松下村塾 in Tokushima の様子



図 2 キャンパス・ビジョンの様子



図 3 学生支援担当教職員研究会の様子



図 4 FD・SD セミナーの様子

次に、全学 FD への参画については、徳島大学全学 FD 推進プログラムの FD・SD セミナーで、学生視点からの話題提供¹³⁾、大学教育カンファレンス in 徳島への参加や発表、運営スタッフを務めた。さらに総合科学部、全学共通教育センターが開催する FD においても、学生視点からの話題提供を行ってきた。学生支援への参画については、学務部学生生活支援課が主催する「学生支援担当教職員研究会」で話題提供や、グループワークにおけるファシリテーターなどを務めた¹²⁾。

また、繋ぎ create の企画の効果検証として、実施企画の参加者アンケートの分析を行い、成果と課題を明らかにし、大学教育に関する研究会で発表を行ってきた^{14,15)}。ワークショップを実施した際には、明らかになった内容を整理し報告することも行ってきた¹⁶⁾。

これらの活動を行うために、繋ぎ create ではミーティングを毎週開催し、活動内容や役割分担などを決めている。合宿研修においてメンバーのファシリテーション能力等のスキルアップ研修を実施することもある。チーム運営は、基本的に学生の自主性と主体性に任せているが、現在は筆者を含む 2 名の教職員が繋ぎ create のサポーターとして助言や指導を行っている。

3. 調査の概要・分析データ

(1) 繋ぎ create の企画の参加者

2010 年 11 月から 2012 年 9 月までの間に、繋ぎ create が開催した企画に参加したことがある、徳島大学の学生・教職員を対象とした。ただし、この期間中に卒業した参加者を含む。また、2012 年 10 月 9 日現在の繋ぎ create のメンバーを除く。

対象者数は、学生 131 名、教職員 28 名 (計 159 名) であり、メールにて対象者全員に質問紙を送付し回答を受け付けると共に、繋ぎ create のメンバーを通じての回収も同時に行った^{注 1)}。調査期間は 2012 年 9 月から 10 月で、回答者数は学生 53 名、教職員 17 名 (計 70 名)、回収率は学生 40%、教職員 61% (全体 44%) であった。質問紙の内容は、①繋ぎ create の企画に参加したことで達成できた項目^{注 2)} (複数選択式)、②現在の繋ぎ create に不足していると思う点 (記述式)、③今後繋ぎ create が担うべき役割 (記述式) である。

(2) 繋ぎ create の学生

2012 年 10 月 9 日現在、繋ぎ create に在籍していた学生 13 名を対象とした。調査方法は 2 段階による無記名の質問紙調査であり、回収率は 100% である。第 1 段階目の質問紙の内容は、④活動歴 (年月数を記述)、⑤活動を通して身についたこと、得たこと (記述式)、⑥活動が学生生活に与えた変化 (選択式) である。第 2 段階目の質問紙の内容は、④活動歴 (第 1 段階目と同様) と、⑦第 1 段階目の調査⑤において記述された内容から項目を抽出し、それぞれの項目について、身についたこと、得たことを複数選択式で問うた。これは、身についたこと、得たことについて、量的データとしても把握するためである。

4. 結果と考察

(1) 繋ぎ create の企画の成果

表 1 は、質問紙調査①の設問「繋ぎ create の活動に参加して、達成できたと思われる項目をすべて選択して下さい。(複数選択式)」という設問において選択された各項目を、学生の選択率の高い順に表している。学生の選択率の平均が 36.8% であるのに対し、教職員の選択率の平均は 13.0% であった。これは、繋ぎ create の企画が「大学生の躍進」という理念のもと開催しているため、企画の目標が学生に焦点を当てたものになっているためである。例えば「自身の大学生活を見直すことができた」という項目は、教職員には適していないことがわかる。そこで、繋ぎ create の企画の成果を考察する上では、学生の選択率を用いるこ

ととする。

表 1 より、選択率が高い項目として「学部・学科を越えた友人ができた (69.8%)」、「人との関わりは大切であると思った (66.0%)」、「教職員と交流することができた (64.2%)」が 60% を超えている。このことから、新しい人間関係を構築する機会になっていることがわかる。続いて、「新しいことをやってみてみたいと思った (54.7%)」、「自分の考えを他人に語るすることができた (54.7%)」、「他人から何かを学ぶことができた (52.8%)」の項目が選択率 50% を超えている。このことから、他者とのコミュニケーションを通じて、学びや向上心を持つことに繋がっていると考えられる。したがって、繋ぎ create の企画では、学生同士や学生と教職員との繋がりや交流の場を創ることで、コミュニケーションを促し、学びや向上心の育成に繋がるきっかけとなる機会を提供できたと推察できる。

(2) 繋ぎ create の企画の課題

次に、表 1 より読み取れる繋ぎ create の企画の課題を見ていく。選択率が 10% 以下の項目としては、「大学に価値を見つけることができた (7.5%)」、「自分のやりたいことが見つかった (気づいた) (9.4%)」が挙げられる。また、「企画後も思っていたことを実行するようになった (20.8%)」、「自身の可能性を広げるための行動ができた (22.6%)」、「自身の興味を持つ幅が広がった (24.5%)」の項目の選択率が 25% 以下である。これらの結果から、繋ぎ create の企画では、必ずしも参加学生の行動変容を促すことには至っていないことがわかる。しかし、この結果は企画ごとに到達目標が異なるため、すべての企画において参加学生の行動変容を促すことが求められているわけではない。

ここから見える今後の課題としては、企画を検討する際に、選択率が低かった項目に関連する目標を設定する場合は、目的、目標と内容との整合性をより丁寧に検討することが必要である。また、効果検証の手法として、企画ごとにより正確な検証が必要であり、企画後の追跡調査の実施も検討する余地がある。

表 1 繋ぎ create の活動に参加して、達成できたと思われる項目の選択率 (%)

達成できた項目	学生	教職員	全体
1. 学部・学科を越えた友人ができた	69.8	11.8	55.7
2. 人との関わりは大切であると思った	66.0	35.3	58.6
3. 教職員と交流することができた	64.2	29.4	55.7
4. 新しいことをやってみたいと思った	54.7	17.6	45.7
5. 自分の考えを他人に語る事ができた	54.7	52.9	54.3
6. 他人から何かを学ぶことができた	52.8	29.4	47.1
7. 自身の可能性を広げたいと思った	49.1	5.9	38.6
8. 企画後も自身の可能性を広げるための行動を行っている	43.4	0.0	32.9
9. 企画後も継続して自身の可能性を広げたいと思っている	37.7	17.6	32.9
10. 積極的に行動するようになった	35.8	5.9	28.6
11. 話しをすることができる教職員ができた	32.1	17.6	28.6
12. 自身の大学生活を見直すことができた	32.1	0.0	24.3
13. 自身の意見を持つことができた	32.1	5.9	25.7
14. 積極的に行動できた	32.1	0.0	24.3
15. 企画後も自分の考えを他人に語るようになった	30.2	11.8	25.7
16. 企画後も自身の意見を持つようになった	30.2	5.9	24.3
17. 今まで意識したことが無かったものを発見できた	28.3	17.6	25.7
18. 大学生活を後悔したくないと思った	26.4	0.0	20.0
19. 視野が広がり、自身の可能性に気づくことができた	26.4	5.9	21.4
20. 企画後も思っていたことを実行するようになった	24.5	11.8	21.4
21. 自身の可能性を広げるための行動ができた	22.6	5.9	18.6
22. 自身の興味を持つ幅が広がった	20.8	17.6	20.0
23. 自分のやりたいことが見つかった (気づいた)	9.4	5.9	8.6
24. 大学に価値を見つけることができた	7.5	0.0	5.7
選択率の平均	36.8	13.0	31.0

(3) 繋ぎ create の学生が活動を通して得たこと
 質問紙調査⑤において、「繋ぎ create の活動を通して身についたこと、得たこと」を記述式で問うた。そのすべての回答の中から、身についたこと、得たことに関するキーワードを抽出すると、全部で 36 項目であった。再度、質問紙調査⑦として、この 36 項目について、身についたこと、得たことを複数選択可能な形式で問うた。表 2 は、抽出された 36 項目を選択率の高い順に表している。選択率の平均は 54.7%であった。

選択率が平均より高い項目を見ていくと、「人との出会いの大切さ (92.3%)」、「人脈 (76.9%)」、「真剣な話ができる仲間 (69.2%)」のように人

との関わり方、人間関係の構築に関する内容が挙げられている。また「人の話を傾聴する力 (76.9%)」、「自身の考えを相手に伝える力 (69.2%)」のようなコミュニケーションに関するスキル、「名刺交換の仕方 (100.0%)」、「ビジネスメールの作り方 (61.5%)」、「会議やミーティングの進め方 (61.5%)」のように社会生活においても必要なスキルが挙げられている。「課外活動における学びの意味 (69.2%)」なども選択率が高い。このことから、活動を通してコミュニケーションや社会生活でも必要なスキルを身に付け、人と関わることの意義や仲間、人脈などを得ていることが伺える。また、課外活動としての

表 2 繋ぎ create の活動で学んだこと, 身についたこと, 得たこととして, 抽出された項目の選択率 (%)

学んだこと, 身についたこと, 得たこと	選択率
1. 名刺交換の仕方	100.0
2. 議事録・企画書などの書き方	92.3
3. 人との出会いの大切さ	92.3
4. 人の話を傾聴する力	76.9
5. 人脈	76.9
6. 大人数の人前で話す力	69.2
7. 自身の考えを相手に伝える力	69.2
8. 企画・イベントの運営の仕方	69.2
9. 課外活動における学びの意味	69.2
10. 真剣な話ができる仲間	69.2
11. ビジネスメールの作り方	61.5
12. 目上の人・立場の異なる人と話す力	61.5
13. 会議やミーティングの進め方	61.5
14. 会議やワークショップの司会の仕方, スキル	53.8
15. コーディネート力	53.8
16. 議論・討論の仕方	53.8
17. 会議やミーティングを行うための準備の仕方	53.8
18. 立食パーティー・飲み会のマナー	53.8
19. 学生生活の充実	53.8
20. 大学教職員との関わり方	53.8
21. プレゼンテーションを行う際に自分の意見を相手に伝える力	46.2
22. ワークショップなどの手法, ノウハウ	46.2
23. 会議やミーティングなどで自分の意見を言う力	46.2
24. 目上の人・立場の異なる人との接し方	46.2
25. 挑戦することの大切さ	46.2
26. 自分自身について (自己理解)	46.2
27. 資料の作り方	38.5
28. 企画力	38.5
29. 相手の立場に立って考える力・話す力	38.5
30. チームワーク	38.5
31. チームメイトの立場に立って物事を考える力	38.5
32. 度胸	38.5
33. 自信, 自負	38.5
34. 学業の大切さ	30.8
35. 相手の意見を引き出す力	23.1
36. 責任感	23.1

表 3 繋ぎ create の学生の活動歴

群	活動歴	メンバーの活動歴
A 群	1 年以上	(2 年)・(2 年)・(1 年 10 ヶ月)・(1 年 8 ヶ月)・ (1 年 5 ヶ月)・(1 年 5 ヶ月)・(1 年 3 ヶ月)
B 群	1 年未満	(6 ヶ月)・(6 ヶ月)・(6 ヶ月)・(3 ヶ月)・(3 ヶ月)・(3 ヶ月)

学びの意義も感じていることがわかる。

次に、活動期間と得たことを比較するために、活動歴が 1 年以上の学生を A 群、活動歴が 1 年未満の学生を B 群とした。A 群が 7 名、B 群が 6 名であり、表 3 は群別の学生の活動歴の内訳を表している。選択率の平均は A 群が 72.6%、B 群が 33.8%であった。表 4 は、各項目について A 群の選択率の多い順に表している。ここで、A 群の選択率が高く、B 群の選択率が低い項目を見してみる。それぞれの項目において、B 群の学生の選択数が 2 名以下であり、A 群の学生の選択数と B 群の学生の選択数の差が 4 名以上のものを抽出すると、全部で 11 項目であった (表 5)。この 11 項目は、長い期間活動を行う中で身につける、あるいは得ることができるもの、という解釈ができる。表 5 の項目から、繋ぎ create の活動期間が長くなるにつれて、立場や年齢の異なる人とのコミュニケーションや接し方、ファシリテーションに関するスキルが身に付き、自己を理解することや自身の学習に対する意識づけができるようになっていると考えられる。

したがって、繋ぎ create の活動では、活動を始めて早い段階から大学教職員とやり取りを行うことで、コミュニケーションや社会生活でも必要なスキルを身につけ、課外活動の意義を感じている。活動期間が長くなるにつれて、ワークショップなどで司会やファシリテーターを経験して関連するスキルを身につけ、大学生の支援や教育に関する企画に携わることで、自身の学習に対する意識づけや自己理解に繋がっていると推察できる。

(4) 繋ぎ create の学生の学生生活に与えた変化

質問紙調査⑥では、大学生生活に関する以下の 3 項目について、繋ぎ create の学生自身の意識、取

り組み方について選択式で問うた^{注 3)}。項目は、(i)自身の学習に対し主体的に取り組んでいるかどうか、(ii)学生生活(課外活動、学外での活動)を有意義に過ごしているかどうか、(iii)将来の進路について考えを持っているかどうかである。いずれの設問においても、回答番号の 2 が、繋ぎ create の活動を始めることによって肯定的な変化があったことを表している。表 6 は、調査⑥の結果を表している。

まず(ii)学生生活の結果を見ると、ほとんどの学生が 2 と回答しており、このことから、繋ぎ create の活動は、課外活動や学外での活動を有意義に過ごすきっかけになっていることがわかる。さらに、活動期間に関係なく有意義に過ごしていることがわかる。

次に(i)自身の学習についての結果を見ると、A 群の学生はほとんどが 2 を選択しているのに対し、B 群の学生は 2 名が 2 を選択し、変化していないという回答がいくつか見られる。このことから、繋ぎ create の活動は、自身の学習に対して主体的に関わるようになるきっかけを与えることがあり、活動期間が長い学生ほどその傾向が強いことが伺える。

最後に(iii)将来の進路については、1 を選択した学生が多く、これは繋ぎ create の活動を行う以前からある程度決まった考えを持っているという回答を表す。また、A 群の 3 名の学生が 4 と回答しているが、これは繋ぎ create の活動を行う以前から、現在も将来の進路について考えが定まっていないことを表している。このことから、繋ぎ create の活動は、将来の進路や将来像を持つことに対して、影響を与えることは少ないことがわかる。また、B 群の学生が全員 1 と回答しており、全体としても 1 の回答が多いことから、はじめから自身の将来に対する考えを持った学生が活動

表 4 繋ぎ create の活動で学んだこと, 身についたこと, 得たこととして, 抽出された項目の群別の選択率 (%)

学んだこと, 身についたこと, 得たこと	A 群の選択率	B 群の選択率
1. 大人数の人前で話す力	100.0 (7)	33.3 (2)
2. コーディネート力	100.0 (7)	0.0 (0)
3. 目上の人・立場の異なる人と話す力	100.0 (7)	16.7 (1)
4. 企画・イベントの運営の仕方	100.0 (7)	33.3 (2)
5. 名刺交換の仕方	100.0 (7)	100.0 (6)
6. 人との出会いの大切さ	100.0 (7)	83.3 (5)
7. 人脈	100.0 (7)	50.0 (3)
8. プレゼンテーションを行う際に自分の意見を相手に伝える力	85.7 (6)	0.0 (0)
9. 議事録・企画書などの書き方	85.7 (6)	100.0 (6)
10. ビジネスメールの作り方	85.7 (6)	33.3 (2)
11. 自身の考えを相手に伝える力	85.7 (6)	50.0 (3)
12. 人の話を傾聴する力	85.7 (6)	66.7 (4)
13. 真剣な話ができる仲間	85.7 (6)	50.0 (3)
14. 課外活動における学びの意味	85.7 (6)	50.0 (3)
15. 大学教職員との関わり方	85.7 (6)	16.7 (1)
16. 会議やワークショップの司会の仕方, スキル	71.4 (5)	33.3 (2)
17. 議論・討論の仕方	71.4 (5)	33.3 (2)
18. 会議やミーティングなどで自分の意見を言う力	71.4 (5)	16.7 (1)
19. 目上の人・立場の異なる人との接し方	71.4 (5)	16.7 (1)
20. 学生生活の充実	71.4 (5)	33.3 (2)
21. 自分自身について (自己理解)	71.4 (5)	16.7 (1)
22. ワークショップなどの手法, ノウハウ	57.1 (4)	33.3 (2)
23. 企画力	57.1 (4)	16.7 (1)
24. 相手の立場に立って考える力・話す力	57.1 (4)	16.7 (1)
25. 会議やミーティングの進め方	57.1 (4)	66.7 (4)
26. 会議やミーティングを行うための準備の仕方	57.1 (4)	50.0 (3)
27. 立食パーティー・飲み会のマナー	57.1 (4)	50.0 (3)
28. チームワーク	57.1 (4)	16.7 (1)
29. チームメイトの立場に立って物事を考える力	57.1 (4)	16.7 (1)
30. 学業の大切さ	57.1 (4)	0.0 (0)
31. 挑戦することの大切さ	57.1 (4)	33.3 (2)
32. 度胸	57.1 (4)	16.7 (1)
33. 自信, 自負	57.1 (4)	16.7 (1)
34. 資料の作り方	42.9 (3)	33.3 (2)
35. 相手の意見を引き出す	42.9 (3)	0.0 (0)
36. 責任感	28.6 (2)	16.7 (1)

※選択率の欄の () の数字は回答者数を表す。

に関わる傾向が見られる。この結果は、ピア・サポートに対して参加意識を持つ学生の特徴を明らかにした研究¹⁷⁾において示されている結果と同様の傾向である。

したがって、繋ぎ create の活動では、活動を始めて早い段階から、課外活動や学外での活動への取り組みに変化をもたらし、有意義に過ごすことができている。活動期間が長くなるにつれて、自身の学習に対しても主体的に取り組むようになる変化が見られた。ただし、繋ぎ create の活動との正確な因果関係を証明するためには、さらなる研究が必要であることは言及しておく。一方で、将来に関する考え方に対しては変化をもたらすことが少なく、自身の将来についてある程度考えを持った学生が活動に参加する傾向が見られた。

表 5 A 群の学生の選択数と B 群の学生の選択数の差が 4 名以上の項目

項目
1. 大人数の人前で話す力
2. コーディネート力
3. 目上の人・立場の異なる人と話す力
4. 企画・イベントの運営の仕方
8. プレゼンテーションを行う際に自分の意見を相手に伝える力
10. ビジネスマールの作り方
15. 大学教職員との関わり方
18. 会議やミーティングなどで自分の意見を言う力
19. 目上の人・立場の異なる人との接し方
21. 自分自身について (自己理解)
30. 学業の大切さ

(5) 繋ぎ create が今後取り組むべき課題

質問紙調査②の設問「現在の繋ぎ create に不足していると思うことは何ですか? (記述式)」のすべての回答の中から、繋ぎ create の不足点を記述している部分を抽出し、カテゴリーごとに分類した。抽出した部分は全部で 72 であり、カテゴリー分類の結果は表 7 に表している (1 つの回答に複数の不足点が含まれている回答が存在する)。表 7 の結果より、効果的な広報、活動内容の洗練、

メンバーの育成・確保等が今後の課題であることがわかる。特に広報関連のカテゴリーでは、戦略不足を指摘する記述が多く挙げられていた。企画内容を適切に伝える手法やスキルの開発、新たな

表 6 繋ぎ create の学生自身の意識、取り組み方の変化について

群	活動歴 (月)	(1) 学習	(2) 学生生活	(3) 将来
A 群	24	2	2	1
	24	2	2	4
	22	2	2	3
	20	2	2	1
	17	3	2	4
	17	2	2	2
	15	2	2	4
B 群	6	2	5	1
	6	4	2	1
	6	2	2	1
	3	1	2	1
	3	5	2	1
	3	3	2	1

※1. 数値は、質問紙調査⑥の解答番号である。選択肢の詳細は、注 3 参照のこと。

※2. (1) 学習における、5. その他の内容は、「変化なし」であった。

※3. (2) 学生生活における、5. その他の内容は、「繋ぎ create の活動によって別サークルに割く時間が減り、有意義に活動できていない。」であった。

表 7 繋ぎ create に不足している点

	不足点	件数
広報	広報戦略	16
	参加者数	8
	チームの知名度	6
活動内容	テーマ・コンセプト	6
	規模	4
	他団体との連携	4
	対象範囲	3
	内容の検討	3
	開催頻度	2
メンバー	人数・偏り	8
	スキル・態度	8
その他		2

広報手段の開発などを検討する必要がある。また、活動内容や企画したワークショップで明らかになった結果などを、研究会の場だけではなく、企画終了後、または定期的に幅広く報告することも考えられる。活動内容については、テーマや目的が不透明であるといった記述が多く見られた。今後は、企画の目的、目標の検討を十分に行い、他大学の活動事例を参考にすることも考えられる。さらに繋ぎ create のメンバーの能力開発については、蓄積された知識やスキルを後輩に伝達する仕組みや、サポートする教職員による指導、学外で開催される研修への参加など、メンバーの育成を体系的に行うプログラムも考えていく必要がある。

次に、質問紙調査③の設問「学内において、オフィシャルな立ち位置も持ち、学内で学生視点から教育改善、学生支援を行おうとしている学生チーム（繋ぎ create）が担うべき使命は何ですか？（記述式）」のすべての回答の中から、役割や使命に関する記述部分を抽出し、カテゴリーごとに分類した。抽出した部分は全部で 68 であり、カ

テゴリー分類の結果は表 8 に表している（1つの回答に複数の使命が含まれている回答が存在する）。表 8 の結果より、半数以上の回答が学生とさまざまなものとの「繋がり」を創ることであった。具体的には、学生同士、学生と教職員間のコミュニケーションの促進や、学生と大学、学生と教育を繋げることである。このカテゴリーには、「変化をもたらすきっかけの場」を期待する記述もいくつか含まれていた。続いて、学生の積極性、自主性の向上、実行力や問題発見力等の能力開発が挙げられていた。このことから、コミュニケーションの促進や、学生と大学・教育を繋げることをきっかけとして、学生の能力開発や学習に取り組む態度の育成に繋げていくことが期待されていると考えられる。そのためにも、学生の主体性や積極性を向上することを目的とした企画を計画する必要がある。さらに、教育・学生生活に関する提案や学生支援に関する役割を求める意見もそれぞれ約 10 件程度挙げられていた。今後は、日常的なピア・サポート活動の実施を検討する必要がある。

表 8 繋ぎ create が担うべき役割・使命

	役割・使命	件数
「繋ぐ」ということ	学生同士・学生と教職員	13
	大学と学生	6
	他大学生と徳島大学生	5
	教育と学生	4
	きっかけづくりからのアプローチ	4
	その他の繋がり	3
学生の成長・行動	積極性・主体性の向上	6
	高め合う・考える場づくり	5
学生からの提案	学生生活に関すること	5
	授業・教育に関すること	3
	教員に関すること	1
学生支援	活動の目的別	4
ピア・サポート	活動の内容別	2
	活動の対象別	2
教育改善活動		2
その他		3

5. まとめ

以上の結果から、これまでの繋ぎ create の活動成果として、繋ぎ create が実施する企画において、学生同士、学生と教職員との交流やコミュニケーションを実現できたと考えられる。その中で、学生の学びや向上心を持つことに繋がった部分があったことも伺える。また、これらの企画を実施する繋ぎ create の学生は、コミュニケーションや社会生活においても必要となるスキル、人との関わり方やその大切さを身につけ、仲間や人脈を得ることができている。さらに、課外活動に対する有意義感や課外活動における学びの意義、自身の学習に対して主体的に取り組む態度を育成することにも寄与できた部分があると考えられる。

一方で、多くの課題が明らかになった。まず、繋ぎ create が実施している企画の課題としては、テーマや目的を明確にし、到達目標と内容との整合性をより丁寧に検討することが必要である。企画の内容についても、これまではコミュニケーション活動が中心であったが、日常的なピア・サポートを充実させることや、学生の主体性や積極性を向上することを目的とした企画を計画することも必要であると考えられる。チームの課題としては、効果的な広報戦略の検討、メンバーのスキル・態度の育成が挙げられた。繋ぎ create をサポートする教職員としては、活動を行う学生の教育的効果を十分に引き出すための支援が必要である。また、今回の調査において、繋ぎ create の学生が活動を通して身につけた能力の中に、学士力や社会人基礎力などに挙げられている能力要素が少ないことから、これらの能力を育成する支援ができれば、より活動の意義が明確になる。さらに、自身の学習に対する取り組みについても、主体的に取り組む態度を、早い段階から育成することが重要である。

以上の課題を踏まえて、繋ぎ create の学生は、学生の能力開発や日常的なピア・サポートを目的とした企画を実施するために、その目的、目標の設定や企画の運営体制を検討するワークショップを実施している。また、サポートする教職員と共に、繋ぎ create の学生を対象としたスキルアッププログラムの検討を始めた。今後は、これらの

取り組みにおける検証が課題となる。

さらに、本研究に関する課題も多く存在している。今回は、繋ぎ create の 2 年間の活動の成果と課題について、質問紙から読み取れる考察を行ったに過ぎない。しかし、本研究は学生による学生支援の発展や活動の教育的効果の検証を行うための端緒となると考えている。今後は、他のピア・サポート活動や課外活動における、教育的効果との比較を行う必要があると考える。また、客観的な評価基準のもと、学生が身につけた能力等を測定することも重要である。これらの視点に立って、さまざまな角度から継続的に研究を行っていくことで、より汎用性のある研究に繋げていくことが求められる。

注

- 1) 繋ぎ create の企画はすべて事前申込制であるため、参加者のメールアドレスを把握しており、適切に管理している。
- 2) 項目の選択肢は、繋ぎ create が学生、教職員を対象にした企画を行う際に、参加者の到達目標として掲げている内容をもとに作成した。
- 3) 質問紙調査⑥の設問と選択肢は以下の通りである。

設問. 学生生活に関わる各項目について、あなた自身の取り組み方または意識の変化として、選択肢の中から適切な数字を 1 つ選び、数字を○で囲んでください。

(1) 自身の学習 (授業, 自身の専門の学習など) に対する取り組み方について

選択肢

1. 繋ぎ create の活動を行う以前から、現在も主体的に取り組んでいた。
2. 繋ぎ create の活動を始めてから、以前に比べて主体的に取り組むようになった。この変化には、繋ぎ create での活動が少なからず影響していると思う。
3. 繋ぎ create の活動を始めてから、以前に比べて主体的に取り組むようになった。しかし、この変化と繋ぎ create の活動には関係がないと思う。
4. 繋ぎ create の活動を行う以前から、現在も主体的に取り組んではいない。

5. その他 ()

(2) 学生生活 (課外活動, 学外での活動など) を有意義に過ごしているかどうかについて

選択肢

1. 繋ぎ create の活動を行う以前から, 現在も有意義に過ごしていると思う。
2. 繋ぎ create の活動を始めてから, 以前に比べて有意義に過ごすようになったと思う。この変化には, 繋ぎ create での活動が少なからず影響していると思う。
3. 繋ぎ create の活動を始めてから, 以前に比べて有意義に過ごすようになったと思う。しかし, この変化と繋ぎ create の活動には関係がないと思う。
4. 繋ぎ create の活動を行う以前から, 現在も有意義に過ごしていないと思う。

5. その他 ()

(3) 将来の進路に関する自身の考え方について

選択肢

1. 繋ぎ create の活動を行う以前から, 現在も将来の進路についてある程度決まった考えを持っていた。
2. 繋ぎ create の活動を始めてから, 将来の進路についてある程度決まった考えを持つようになった。この変化には, 繋ぎ create の活動が少なからず影響していると思う。
3. 繋ぎ create の活動を始めてから, 将来の進路についてある程度決まった考えを持つようになった。しかし, この変化と繋ぎ create の活動には関係がないと思う。
4. 繋ぎ create の活動を行う以前から, 現在も将来の進路について考えが定まっていない。

5. その他 ()

参考文献・資料

- 1) 中央教育審議会, 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて, 2012.
- 2) 中央教育審議会, 学士課程教育の構築に向けて, 2008.
- 3) 西本佳代: 学生支援活動の全国的特徴, 高等教育研究叢書, 112, 33-42, 2011.
- 4) 日本学生支援機構, 大学, 短期大学, 高等専

門学校における学生支援取り組み状況に関する調査 (平成 22 年), 2011.

- 5) 清水 亮・橋本 勝: 学生・職員と創る大学教育, ナカニシヤ出版, 2012.
- 6) 木野 茂: 大学を変える学生が変わる, ナカニシヤ出版, 2012.
- 7) 徳島大学 FD の定義, 徳島大学大学教育委員会 <http://www.cue.tokushima-u.ac.jp/FD/article/000657.html>, (2012.12.31) .
- 8) 佐藤浩章: 学生支援策としてのピア・エデュケーションの可能性, 現代の高等教育, 473, 27-31, 2005.
- 9) 川島啓二: 大学教育の革新と FD の新展開, 国立教育政策研究所紀要, 139, 9-20, 2010.
- 10) 山田剛史: ピア・サポートによって拓かれる大学教育の新たな可能性, 大学と学生, 87, 6-15, 2010.
- 11) 吉田 博・英 崇夫: 学生による自主コミュニケーション活動, 工学教育, 60, 2, 63-68, 2012.
- 12) 繋ぎ create, 平成 22, 23 年度繋ぎ create 活動報告書, 2012.
- 13) 日置善郎・宮田政徳・川野卓二・香川順子・吉田 博・奈良理恵: 2011 年度徳島大学全学 FD 推進プログラムの実施報告, 大学教育研究ジャーナル, 9, 152-171, 2012.
- 14) 吉田 博・野中 亮・池内 将: 学生による正課外活動, 第 59 回中国・四国地区大学教育研究会プログラム集, 7-8, 2011.
- 15) 浦邊研太郎・福田喬也・牧迫雄也・小鳥正也・吉田 博: 大学生による交流型ワークショップの成果と課題, 平成 23 年度大学教育カンファレンス in 徳島発表抄録集, 38-39, 2012.
- 16) 牧迫雄也・浦邊研太郎・野中 亮・小鳥正也・吉田 博: 大学生が考える在学中になすべき活動, 平成 23 年度大学教育カンファレンス in 徳島発表抄録集, 40-41, 2012.
- 17) 西本佳代: 誰がピア・サポートをするのか, 大学教育学会誌, 33, 1, 130-136, 2011.